

窓辺

光技術産業

いけの
池野 文昭
ふみあき

シリコンバレーが産声を上げる10年以上も前、浜松高等工業学校（現静岡大工学部）で世界初、ブラウン管に「イ」の字が映し出された。1926年、その瞬間がテレビの始まりだ。

成し遂げたのは、後に「テレビの父」と呼ばれる浜松市出身の高柳健次郎博士。戦後、焼土の中で競合企業の枠を超えた企業横断プロジェクトがなされ、日本のテレビ放映が実現された。国民生活を豊かにしただけでなく、戦後の日本経済復興にも大きく貢献した。

高柳先生の教え子たちは各方面で活躍し、当時の教え子たちが起業した小さな無名ベンチャーが現在、世界屈指の光技術会社「浜松ホトニクス」だ。光技術は、さまざまな分野に応用可能な基盤技術であり、実際に医療や電気、映像など多くの領域で必須技術になっている。

日本政府は地域から世界へ躍進する産業生態系を作り、日本経済を地方から再興する政策を打ち出している。その一つが、昨年から始まった文部科学省の「地

域イノベーション・エコシステム形成プログラム」。国内4地域が採択され、静岡大、浜松医科大を中心とする大学、地元企業、金融機関、浜松市、静岡県などが一体になり光を医療応用するプロジェクト「光の尖端都市・浜松が創成するメディカルフォトニクスの新技術」が選ばれた。

これは浜松の発展にとっても重要だが、医療は人類にとって最重要である。浜松の光技術が人命を救うことに誇りを持ち、それを地域みんなで分かち合いたい。私は今、微力ながら総責任者としてこの重要なプロジェクトを指揮している。

（スタンフォード大
主任研究員、医師）